

Title	M・L・キングの神人共同論
Author(s)	菊地, 順
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.59, 2015.3 : 183-209
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=5466
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

M・L・キングの神人共働論

菊 地 順

はじめに

マーティン・ルーサー・キング・ジュニアの非暴力直接大衆運動を顧みるとき、そこにはキングを支えた人格神への深い信仰を見ることが出来る。しかも、それは知的にも深く捉え直された信仰であつて、この信仰の知的確信なくして非暴力直接大衆運動を貫くことはできなかったであろう。その知的確信とは、突き詰めて言えば「神人共働論」として総括されるもので、この信仰的知的確信に立つてキングは非暴力直接大衆運動を闘つたと言える。この神人共働論とは、人間は歴史の中で神の共働者として歩むことをとおして悪を克服し、正義を実現することができるとする考えである。すなわち、キングは、神が歴史に主体的に働きかけてくるだけではなく、人間もまた神の共働者として主体的に働くことが不可欠であり、またその力を持つと考え、その認識と確信に立つて非暴力直接大衆運動を展開したのである。そしてまた、神の共働者として働くことによつて「神の子」となることがキリスト者としての使命であり、またキリスト教倫理の究極の目標であると考えたのである。

本論文では、この神人共働論の概要を明らかにし、キングの信仰と闘いの中に占めるその位置を示し、また同時にそ

れのもつ問題点を検討したいと思う。

1. 背景——ボストン大学の人格主義思想

キングは、明確な人格神の信仰を持っていた。それは、ボストン大学大学院に提出された博士論文において、存在論的立場に立つパウル・ティリツヒと実証主義的立場に立つヘンリー・ネルソン・ウィーマンの神観念を批判する形で、知的にも明示された。そして、そこで明らかにされた神とは、恩師エドガー・S・ブライトマンによつて示された「有限的・無限的神」に深く共鳴するものであった。すなわち、その神は、歴史において悪に対峙し、それに打ち勝つ力として働く正義の神であるのみならず、人間の一人ひとりの苦悩に心を砕き、共に苦しみ、救いのみ手を差し伸べる愛の神でもある。そして、そうした仕方において、この神は、人間の祈りの唯一の対象ともなる神なのである。キングは、このような神を人格神と呼ぶが、この人格神は、同時にもう一つの特質を持つ。それは、神は神を信じる人間をその働きのパートナーとするということである。つまり、神は一方的に正義を実現したり、救済をもたらしたりするのではなく、人間をそのパートナーとし、人間と共に働くことをとおして、その目的を達成するのである。というのも、神は人間に自由を与え、その自由において神に応答するよう創造したからである。したがって、そこに神と人間との共働が生まれてくる。そして、この共働に生きることが、人間の重要な使命ともなるのである。⁽¹⁾ブライトマンは、この点についてこう語っている。「多くの善は、神の意志と人間の意志との共働を通してのみ可能である (many goods are possible only a co-operation of God's will and man's will)」。またキング研究者のルーフス・バーローの要約的言葉で言えば、「この神は苦しむが、しかしそれを常に打破する。障害に直面するが、しかし創造された人格との共働において、しばしば

それを克服する」のである。⁽²⁾ キングは、この確信を、ボストン大学での学びをとおして与えられたが、そこには同時に人間に対する積極的で肯定的な思いがあった。そのことについて、キングは次のように述懐している。「ボストン大学の神学部は、ウォルター・ミュールダー学部長やアレン・ナイト・チャルマーズの影響のもとに、平和主義にふかい同情をいだいていた。ミュールダー学部長もチャルマーズ博士も、皮相な樂觀主義にもとづくものではなく、人間が神の共働者 (the worker to God) となる場合に生ずる人間の可能性にたいするふかい信仰にもとづく、社会的正義への強い情熱をもっていた」。⁽³⁾ ミュールダーもチャルマーズもボストン大学の伝統的な人格主義思想を継承した教授たちであり、キングが直接影響を受けたブライトマンやデイウォルフらの親しい同僚でもあった。そして、そうした人格主義思想の伝統の中で育まれていたのが、キングによって「神の共働者」と表現された人間の可能性への信頼であつたのである。もちろん、そこには神への深い信頼があり、その信仰に基づくものであるが、この「神の共働者」としての人間の可能性は、キングの生涯を振り返ったとき、非常に重要な概念であると言える。というのも、この可能性への確信こそが、モンゴメリーから始まつた正義を求める社会的闘いにおいて、キングの行動の原動力としてキングを支え強めた精神的(靈的)力であつたと考えられるからである。その意味で、この信仰的確信は、キングのすべての活動の中心にあつたと言える。そこで、本論では、この確信、すなわち人間が持つ神との共働の可能性を「神人共働論」として総括し、その内容をより明確にしたいと思う。⁽⁴⁾

2. 概要——説教「面倒な問題の答え」から

そこで、改めて、キングの論じる神と人間との共働論に目を向けたいと思うが、この点について最もまとまつて論じ

られているのは、「面倒な問題の答え」⁽⁵⁾と題するキングの説教である。これは、歴史における悪の問題を扱ったもので、どうすればその悪を排除することができるかを論じたものであるが、しばらくこの説教に耳を傾けたいと思う。

まず、悪の問題に関して、キングは、「官能、利己主義、残虐」といった悪は「外部からの侵入者」であって、人間が「道徳的・霊的な尊厳さ」に到達するためにはそれを追い出さなければならないと考える（二二二―二二三）。そして、そのために取られる方法は三つあると言う。一つは自らの力で悪を追放する方法であり、もう一つは神に全面的に依存する方法である。そして第三には、神との共働によつて悪を追放する方法である。もちろんキングは、この第三の方法こそ唯一悪を追放することができる道であると主張するのであるが、その内容をよりよく理解する上でも、初めの二つの方法に目を向けることは大切であろう。

そこでまず、自らの力で悪を追放する第一の方法であるが、これは、キングによれば、「人間に彼自身の力と創意によつて悪を取り除くよう」要請するもので、より具体的には、「人々に公平な機会と立派な教育を与えよ。そうすれば、彼らは自らを救うことができる」とする考えである。また同時に、この考えは、悪を追放する試みにおいて、「神を送り出し、人間を招じ入れ、神の導きに人間の創造を置き換えてしまった」考えでもある。すなわち、これは、神なしで人間の力のみで悪を追放することができるとするヒューマニズムの考えである。キングによれば、それは、歴史的に見れば、ルネッサンス期に生じ一九世紀まで続いた試みである。しかし、歴史が示すように、こうした試みにおいては悪を取り除くことはできなかったのである。キングは、社会悪を取り除く人道主義的運動を否定したり、あるいは「科学やルネッサンス後の偉大な学芸」を過小評価する意図はないとしながらも、その問題点を以下のように指摘する。「人間は自分自身の力では決してこの世界から悪を追い出せないのだ。ヒューマニズムの希望は、人間性固有の善に関するあまりにも大きな楽観論にもとづく幻想に過ぎない」（二二五）。キングはルネッサンス以降のヒューマニズムの躍進と貢献を評価しつつも、その根底にある楽観論は、「人間の心を解放しようと試みながら、人間が罪を犯す能力を

持っていることを忘れていた」(二二五)と批判するのである。そして、その結果、悪を排除することに失敗したと見る。

それに対し、第二の方法は、逆に神に全面的に依存し、人間的な努力を放棄する道である。これは、「人間が従順に主を待ち望めば、神がご自身の適当な時に、お一人でこの世界を救い給う」とする考えで、この背後には、第一の方法とは逆に、人間性に対する悲観論が支配している。すなわち、「罪深い人間が何かすることができるといいう能力」を完全に無視しているのである。キングによれば、この考え方は、宗教改革期において人間の墮落が強調され過ぎた結果生じたもので、それはルネッサンス期の楽観論と対極をなしている。このことについて、キングは次のように語る。「ルネッサンスは楽観的に過ぎたが、宗教改革は悲観的過ぎた。ルネッサンスは、人間の善に集中し過ぎたので、悪に対する人間の能力を見過ごしてしまつた。宗教改革は、人間の邪悪さに集中し過ぎたので、善に対する能力を見過ごしてしまつた。宗教改革は、人間の性質が罪深く、人間が自らを救うことができないことを断言した点では正しかったが、神の像が人間から完全に拭い去られたと主張した点では間違つていた」(二二六)。ここで語られているように、キングは「神の像」を人間理解の中心に据えているが、この「神の像」は人間の墮罪においてもなおも存続しており、それゆえに人間は決して無力なのではないのである。また、そののみならず、その力を發揮するよう求められているのである。この点について、キングは以下のように語る。「人間は、神がひつぱり出して下さるまで完全墮落の谷間に放置された見込みのない病人ではない。彼はむしろ、罪というそこひ「白内障」で視力が弱まり、うぬぼれというビルスによつて魂が弱められただけの立派な人間なのである。しかし、山に向かつて目を上げるために必要なだけの視力は残っており、罪に打ちひしがれた自分の弱い生命を偉大な医師にゆだね、罪に荒らされた跡を治療してもらうに必要なだけの神の像が残っているのだ」(二二九)⁶⁾。

いずれにせよ、キングによれば、この第二の方法も悪を追い出すことはできないのである。しかも、そればかりか、

この方法においては、今も触れたように、そもそも神と人間についての理解そのものが間違っているのである（第一の方法は神の存在そのものを度外視している）。この点について、キングは次のように語っている。「神がすべてのことをして下さるという考え方の本当の弱点は、神と人間の両方についての間違った概念にある。それは、神を絶対的に最高の方とする結果、人間は絶対的に無力なものとなる。また人間は、神に仕える以外何もできないほど、絶対的に墮落したものだとしている。さらに、神が全く世界を超越し、力強い侵入を通じてのみ、そこで世界に触れ給うに過ぎないほど、世界は罪で汚れているとみなす」（二二九）。つまり、この考えは、神を絶対的な力を持つ存在とし、その結果、神を「父」ではなく「独裁者」にしてしまうのである。また同時に、人間を悪の世界にはいまわる墮落した「無力な虫」にしてしまう。しかし、キングは、そうした見方を批判するのである。キングによれば、神は「王」であり「主権者」ではあるが、しかし決して人間から自由を奪う独裁者といった存在ではなく、「愛をもってわれわれを見守り、われわれがわれに帰って、疲れた足を引きずりながら父の家へ帰る時には、寛大さをもって両腕を広げて待つて下さる」父なる存在なのである（二三〇）。そしてまた人間も、罪の中に留まってはいるが、決して無力な存在ではないのである。人間は、すでに触れたように、神の呼びかけに十分応えていくことのできる力を持ち、またそれゆえに神の共働者ともなることができるのである。

ところで、この第二の方法は、もう一つの点においても重大な誤りに陥っていると言う。それは、「祈り」である。後でも見るように、神と人間との共働を実現するのは「祈り」であり、祈りが信仰と共に神人共働論の中核に位置しているが、この第二の方法においては、この祈り自体が歪められ、それゆえに、それは誤った祈りとなるのみならず、誤った生き方をもたらすのである。この点について、キングは次のように語っている。「神がすべてのことをして下さるならば、人間は神に何でも頼んでしまい、神は、どんな些細な用事にも呼び出される『宇宙のベル・ボーイ』に過ぎなくなってしまう。また神が全能と考えられ、人間が全くの無力とみなされるために、祈りは、労働と知性に代わる

ものとなる」(二二七)。すなわち、神が絶対の力を持ち、人間が全くの無力であるならば、神は人間のどんな些細な要求にも応える「宇宙のベル・ボーイ」となり、人間は祈りと共に重要である人間に課せられた「労働と知性」を放棄し、全くの無為の中に陥ってしまうのである。この祈りと労働についても、以下で改めて扱うが、この第二の方法は、悪を追放することができないというだけではなく、それ以上に、今見たような致命的な誤りを持つのである。

ところで、少し遠回りになるが、こうした問題点に加え、キングはこの第二の方法をめぐってもう一つ重要な批判を展開している。それは、この第二の方法に見られる誤った見方が、人々の宗教観を大きく歪めてきたという点である。この点について、キングは以下のように指摘する。「このようなかたよった宗教改革の神学は、しばしば純粹にあの世だけの宗教を強調してきた。あの世だけの宗教は、この世界が全く望みのないことを力説し、個人に対し、来るべき世界のために、専心魂の準備をするよう要請する。宗教は、社会改革の必要を無視することにより、人間生活の主流から遊離してしまうのである」(二二七)。さらにまた、こうも指摘している。「このような一面的な強調は、福音が人間の魂ばかりでなく、肉体にも関係している事実を軽視することによって、宗教的なものと世俗的なものを二分してしまうという悲劇を生み出す」(二二七)。すなわち、第二の方法は、この世とあの世を区別し、魂と肉体を二分してしまう。あの世での魂の救いのみを強調し、現実の苦しみや問題に積極的に対応しようとはしない無為の宗教を生み出してきたのである。特にこれは、黒人の教会でも、現実には絶望する中で繰り返し語られて来たことでもあり、キングは、特にラウシェンブッシュの社会的福音の強い影響を受ける中で、そうした偏った分裂した宗教観を厳しく批判した。したがって、そうした視点からも、この第二の方法は、完全に退けられなければならないのである。

そこで、われわれは、キングが語る第三の方法に目を向けなければならない。それはすでに二つの方法を検討する中で間接的に語られてきたことではあるが、この点について、改めてキングの語るところに耳を傾け、その内容を確認したいと思う。キングは、以下のように語っている。「社会悪は」人類が神に対する服従を通じ完全に団結することに

よって取り除くことができる。道德的勝利は、神が人間を満たし、（中略）人間が神に対する信仰により自分の生活を開く時、達成されるであろう。（中略）「人種的な正義は」大勢の人々が自分たちの生活を神に向かって開き、神が自分たちの魂に神聖なすばらしいエネルギーを注いで下さるのを受け入れる時はじめて実現するのである。（中略）「平和な世界という昔からの貴いわれわれの夢は」人々が自分たちの生活を神に向かって開き、神に、自分たちの生活を愛と相互の尊敬と理解と善意で満たしていただく時、はじめて実現されるのだ。社会の救済も、人間が神の力強い贈り物を喜んで受け入れることによってのみ、達成されるであろう」（二三三）。さらにこうも語っている。「人間と神の両者が、神の側における神ご自身の自由な贈り物としての溢れるばかりの愛により、また人間の側における完全な服従と受容性により、不思議な目的の一致において一つとされる時、古いものを新しいものに変え、罪という致命的なガンをえぐり出すことができるのである」（二三二）。すなわち、神は、その自由の中で、溢れる愛をもって人間にかかわり、人間もまた、その自由の中で、信仰と服従において神に応答するとき、神と人間は「不思議な目的の一致において一つとされる」のである。そして、その一致において力を与えられ、罪を克服し、悪を排除し、正義を実現することができると言うのである。すなわち、キングは、この神と人間との共働こそ悪に打ち勝つ唯一の道であり、またそれがキリスト者として歩むべき道であると考えたのである。なぜなら、すでに触れたように、人間には未だ「神の像」があり、罪の中にまみれているとはいえ、神と共働する力が残されていると考えたからである。

3. その歴史的背景——現実の取り組みの中で

ところで、このようにキングは、神と人間との共働を悪に打ち勝つ唯一の道と考えたのであるが、この背景には、歴

史的闘いにおいてキング自身が直面した厳しい現実とそれに対する取り組みがあった。すなわち、その現実とは、キングが繰り返し語った悪の頑強さである。それは受身的態度でいる限りは決して消滅することではなく、能動的な取り組みが不可欠であったのである。この点について、キングはこう語っている。「悪の機構は、受け身で待つだけでは滅びることはない。もし歴史が何ごとかを教えるなら、悪というものは頑強ではげしく抵抗するものであり、ほとんど狂信的な反抗を示して、けつして自ら進んでその砦を廃止するようなことはない、ということである」⁽⁷⁾。同様に、こうも語っている。「みなさん、われわれが合法で非暴力的な断乎たる圧力をもつて対処しなければ、公民権のただの一片すら勝ち取れなかったことをお伝えしなければならないのです。特権を握る集団が、自発的にその特権を放棄することはめったにないとは、悲しくも歴史の語る事実であります」⁽⁸⁾。「苦い経験をとおして、われわれは、自由は決して迫害者の側から自発的に与えられるものではなく、迫害に虐げられている側が要求しなければならないのだ、ということを知りました」⁽⁹⁾。さらにキングは、「とき」それ自体は善にも悪にも不偏向なものであるが、それを建設的に用いるべきことを主張して、こう語っている。「人類の進歩は、不可避性という歯車が回って進んでゆくものでは決してないのです。人類の進歩は、進んで神の協力者たらんとするひとびとの倦むことなき努力によつてもたらされるのであり、このひたむきな働きかけがなければ、ときそのものが、社会停滞の勢力に与することになってしまうのです」⁽¹⁰⁾。このように、キングは、黒人の長い差別された歴史と自らの闘いをおして、悪の頑強さを深く思い知らされると共に、行動の必要性を痛感させられたのである。そして、そうした経験と認識が、神人共働論の一つの根拠となっているのである。

また、このことに加え、もう一つキングの神人共働論を支えたのは、歴史における神の働きである。キングは、神の働きを、単なる聖書の教えとして論じたのではなく、その背景には、歴史において悪に対抗し、それを克服する、神の働きの経験とそのことへの確信があったのである。そのことを象徴的に表すのは、キングがしばしば用いた「時代精神 (Zeitgeist)」という言葉であろう。これは、ヘーゲルの用いた言葉であるが、キングはしばしばこの言葉において、神

の歴史的働きかけを語っている。ただし、これ自体一つのまとまったテーマであるため、その詳細は稿を改めて論じたいと思う。

このように、キングは歴史的経験を踏まえて、神人の共働ということを語るのであるが、それでは、キングは、その歴史的取り組みにおいて、その行動をどうあるべきものと考えたのか。この問いに対するキングの答えは明確である。それは、一言で言えば、「非暴力直接行動」である。⁽¹²⁾ この具体的内容については、すでに別のところで論じているため省略するが、⁽¹³⁾ ここではその理由だけを確認しておきたい。キングによれば、黒人の地位向上を求める闘いの歴史はいくつかの形が見られるが、その代表的なものの一つは、白人の良心に道徳的に訴えることによって正義を実現しようとするやり方である。これは、ブーカー・T・ワシントンによって代表される取り組みであるが、これに対してキングは批判的である。というのも、こうした「圧力を伴わない説得」というやり方は、正義を実現するどころか、逆に悪を温存し、それを固定化し、一層悪化させる傾向があるからである。⁽¹⁴⁾ それに対して、キングは「非暴力直接行動」を主張するのである。すなわち、「われわれが進むべき道は、受動的にただ説得に頼ることに、あるいは能動的に暴力の反乱を起こすことにもあるのではなくて、これら両者の正反対の真実を一致させ、同時にこの両者の不適当さや効果のなさを避けるような、いつそう高度の統合体にあるのでなければならぬ」。⁽¹⁵⁾ キングは、黒人の置かれた状況を鑑みたとき、受動的説得でもなく能動的暴力でもなく、しかも受動性と能動性を兼ね合わせた統合体こそ有効であると考えたのである。そして、それが「非暴力直接行動」であつたのである。それゆえに、キングは、これこそ「われわれが持っている唯一の、真の道具である」とも語っている。⁽¹⁶⁾ なお、このことに加え、その運動を担つたのは一般「大衆」であつた。それは、従来の法廷闘争では弁護士を中心とする活動家たちが中心であつたのに比べ、大きな特色をなしている。そのため、キングたちの闘いをより総括的に「非暴力直接大衆運動」と表記することも可能であろう。⁽¹⁷⁾

4. その実際——信仰と祈り

以上、キングの語る神人共働論の概要とその歴史的背景を見てきたが、最後に、この神人共働の実際について見ておきたい。まず、この神人共働論において神と人間とを結ぶものは、言うまでもなく信仰である。キング自身、「神が人間を通じて働き給う扉を開く原則が信仰である」(二三一)⁽¹⁸⁾と語っている。したがって、神人共働論というのは、神人協力説のように信仰に至る議論ではなく、あくまでも信仰に生きる者の議論であり、信仰を前提としている。そしてこの信仰は、すでに見たように、「神からの流れに対し、すべての側面を開くことであり、すべての段階でそれに向かつて自分の生活を開くこと」(二三二)であって、それは生きた実践的信仰である。またキングは、聖書に示された信仰を「意志の信仰」と「心の信仰」との二つの型に分け、前者を「知性が神の存在を信じることに同意する」信仰とみなし、後者を「人間全体が信頼して自己を放棄する行為に熱中する」信仰とみなすが、神を知るためにはこの後者の型を持たねばならないとも語る。というのも、キングによれば、「意志の信仰は理論に向かつていくが、心の信仰は一人の人格に集中する」からなのである(二三二)。

このように、キングは信仰の重要性を語るのであるが、この信仰は、キングにとつては、パウロが語る信仰義認の信仰でもあった。すなわち、キングは次のように語っている。「パウロにとつて、信仰とは、キリストを通じて、われわれを罪の束縛から解放しようとする神のみむねを受けいれる人間の能力である。神は、高潔な愛をもつて、われわれ自身ではできないことをわれわれのためにして下さろうと、自由に申し出給う。これをわれわれが謙虚に心を開いて受けいれることが信仰である。かくしてわれわれは信仰により救われるのだ。神によつて満たされた人間と、人間を通じて働き

給う神とが、われわれの個人生活と集團生活に信じられないほどの変革をもたらすのである」(二三二)。このように、神人の共働を生み出すのは信仰であり、その信仰なくしては両者の出会いも共働ものないのである。ただし、後で見るように、キングはある程度人間の自由意志を認めるため、キングの語った信仰はマルティン・ルターの語った信仰義認論、あるいはルター派の正統主義が語った信仰義認論とはいささか距離があると言わなければならない。

ところで、この信仰との関連でもう一つ重要なのは「祈り」である。それは、信仰に基づく神と人間との交わりを生み出すのは、祈りであるからである。その限りでは、祈りは信仰と同じく、神人共働論の核に位置する。ただし、先ほど触れたように、誤った神人関係論は誤った祈りを生み出す危険性がある。それは、人間が神に一方的に願うだけで、何の努力もしない結果に陥ることである。しかしまた、キングにとつて、正しい祈りは神と人間とを結びつけ、人間に神への服従を促し、神との一致に導くものである。そして、それは神との共働へと人間を促すのである。したがって祈りは、そこで終わるものではなく、そこから行動を生み出すのである。なぜなら、人間は全人格的に神と交わるからである。すなわち、靈的に交わるのみならず、肉体的にも知的にも交わるからなのである。そして、そうした行動を生み出していく祈りこそ健全な祈りなのである。こうした祈りについて、キングは具体的に次のように語っている。「われわれは、平和のため真剣に祈らねばならない。しかし、また軍縮と核兵器実験停止のため精力的に活動しなければならぬ。(中略) われわれは、絶えざる情熱をもって、人種的正義のため祈らねばならない。しかし、われわれは、一つの計画を展開し、われわれ自身を大衆的な非暴力運動に組織化するため意を用い、人種的不正義に終止符を打つため全身全霊を捧げねばならない。われわれは経済的正義のため絶えず祈らねばならない。しかし、同時にわれわれの国内と世界の未開発諸国における富に分配を改善する社会改革を実現するため、一生懸命努力しなければならぬ」(二三八―二三九)。こうしたキングの主張は、人間の自由意志とも関連しているが、その点については後で扱いたいと思う。

このように、キングの神人共働論の中核には祈りがある。信仰者と神を結ぶのは祈りであり、キング自身そのことを深く自覚し、実践したのである。この点について、キング研究者の一人レヴィス・ボールドウィン (Lewis V. Baldwin) は、「キングは、歴史の神は祈る人間をとおして働き、また神の約束は信仰者の祈りに対する応答の中で実現されると確信していた⁽¹⁹⁾」と語っている。おそらく、キングは、モントゴメリーの闘いの中で、祈りの重要性を再認識させられたのではなかろうか。キングは、バス・ボイコット闘争が進む中で、白人たちからの脅迫が激しさを増していったとき、ある夜かかってきた脅迫の電話に我を失うほど動揺するも、その時真剣に祈った祈りが神に聞かれるという深い経験をしている⁽²⁰⁾。このことは、キング自身、いろいろなところで語っているが、牧師の息子として成長し、また自ら牧師として働く中で、祈りは生活の一部であつたはずのキングが、改めて祈りの大切さとその力を経験した出来事であつたと言える。そして、祈りの生活は、その後の人生を貫く生命線ともなつていったのである。

以上のように、キングは、ただ神を信じるだけではなく、神と共に働くことをとおして、悪を退け正義を実現することができると考え、またそうする力、可能性が人間にはあると確信していたのである。そして、それはまた、キリスト者としての務めであり、使命でもあると考えていた。すなわち、それが、キリストが命じた「神の子」となることであつたのである。キングは、次のように語る。「神は、われわれが自分の生活から悪を追い出そうとし、神のみむねに従う本当の子供となる時、われわれと協力して下さることを約束し給うた。(中略) いかなる人間も、キリストにあれば、新しい人格となり、古い自我は去つてしまつて、神により変えられた神の子となるのだ」(二三五)。キングは、神との共働において、新しい人格としての神の子になることを目指したのである。そして、それが、キリスト教倫理の根幹とも考えたのである。あの有名な人生最後の演説となつた結びの言葉の中で、キングは、奇しくもこう語っている。「たしかに私も人並みに長生きをしたい。長生きにはそれなりの意味がある。でも今の私には重要なことではない。私が望むのは、ただ神の御意志を行うことだけである⁽²¹⁾」。「神の御意志を行うこと」、それが年を重ねる中でますますキン

グの深い確信となつていったが、それはまた、キングが「汝の敵を愛せよ」とのキリストの教えにおいて、初めから自覚していたことでもあったのである⁽²²⁾。

5. 神学的考察——神人協力説と対比しつつ

以上、キングの神人共働論の概要を一つの説教を中心として概観したが、ここで改めて、この主張に対する神学的考察を加えておきたいと思う。というのも、ここには重要な神学的問題が含まれているからである。それは、何よりも、神学的伝統においては「自由意志」という用語で論じられてきた問題である。すでに見たように、キングは「神の像」という点から人間を見ているが、しかしキングにおいては、それは原罪において損なわれたものではあるとしても、完全に失われたものではなく、人間には神との共働を可能とするだけの力があるのである。すなわち、何らかの自由意志が存在するのである。これは、歴史的にはアウグスティヌスとペラギウスとの間で論争となつた、いわゆるペラギウス論争から始まり、半ペラギウス論争、中世の神人協力説、宗教改革期のルターとエラスムスの論争へと展開されていった一連の論争に関わることになる。そこで、必要な事項の確認も含め、こうした歴史の中で、キングはどういう位置を取るのかを見ながら、その神学的特性を明らかにしたいと思う。

まず初めに、改めて伝統的な神人協力説(synergism)について確認しておきたいと思う。というのも、すでに触れたように、神人協力説は何よりも信仰に至る過程での議論ではあるが、キングの神人共働論には、そこで議論されている問題が含まれているからである。まず、カトリック神学者のペトロ・ネメシエギによると、神人協力説は、「救いに至るためには、神の恩恵とともに、それに協力して働く人間の意志が必要であるとする説」である⁽²³⁾。これは、ギリシャ

語の *synergiein* (協力するの意) に由来する神学用語で、日本では一般に神人協力説と訳されてきた(ただし、「神人共働説」という訳も見られる)。また、ネメシエギによると、その聖書の根拠の一つはフィリピの信徒への手紙二章一二―一三節の言葉で、人間が救いに向かつて歩むためには、人間の「内に働いて、御心のままに望ませ、行わせておられる神」の働きと、回心し、「自分の救いを達成するように努め」る人間の努力が必要であるとの主張にある。すなわち、神の恩恵と人間の自由意志との協力が問題となっている。しかし、ネメシエギによれば、この両者の関係をどう考えるかにおいては、東方教会と西方教会では異なると言う。すなわち、東方教会では両者を同等にみなし、「神が与える充分な恩恵に人間が自由意志によつて同意し、救いに向かつて歩むことができる」と主張する(そのため、神人協力説を肯定する)。しかし、西方教会では、アウグスティヌス以来の予定説を取るため、「原罪後の人間の救いに役立つ意志行為そのものが、充分な恩恵とは異なる効果的恩恵の結果」となり、そのため自由意志の位置が明確でない。しかし、ネメシエギによれば、宗教改革期、ルターは回心に関する人間の「自由意志の協力」を否定し、その後生じた神人協力主義論争を経て和協信条も神人協力説を否定した。それに対し、トリエント公会議は、原罪によつても人間の自由意志は消失しなかったとの立場に立ち、「罪を犯して神に背いていた人々は、回心するように彼らを刺激し、助ける神の恩恵を通して、その恩恵に自由に同意し、協力することによつて、彼ら自身の義化のための準備をしている」との主張に至つたと言う。そしてまた、現代では、「東方教会の見解をより正しいものと考える〔カトリックの〕神学者の数が増えてつある」と指摘している。

以上のネメシエギの指摘からすれば、カトリック教会は神人協力説に大きく傾いているのに対して、プロテスタント教会は、それに反対の立場に立つ。そこで、キングもプロテスタントの伝統に立つために、まずプロテスタントの立場を明確にしておきたいと思う。プロテスタントの立場は、何よりも、ルター派の集大成としての和協信条に見ることができるが、和協信条によると、まず一連の議論の問題の核心は以下の点にある。すなわち、「主要な問題はただ一つで

ある。神のことが説かれ、神の恵みがわれわれに差し出されるとき、まだ生まれかわっていない人間の理解と意志とは回心と再生にあたつて、自らの、墮罪後もまだ残っている力によつてなができるのかということである。もう少し具体的に言えば、「人間は自らそのような恵みに向かつて備え、恵みを受け、これに対して然りと言うことができるのだろうか」という問題である。⁽²⁴⁾ すなわち、墮罪後、原罪を負う中で生まれ、未だ救いに至っていない人間は、自らの力でその救いに至ることができるのか、という問題である。そして、その力とは、人間の持つ「自由意志」のことである。これに対し、ある程度肯定的見方に立つのが神人協力説であるが、和協信条は、これを以下のように規定している。すなわち、神人協力説とは、「人間は靈的な事柄に関しても、善に向かつて完全には死んでおらず、ひどく傷を負っているだけであり、半死の状態である。だから、自由意志は、ことを始め、神に向かつて自分で自分の力によつて立ち帰り、神の律法に心から服従するには、あまりにも弱すぎる。しかし、聖霊がことを始め、福音をおしてわれわれを召し、その恵みと罪のゆるしと救いをさし出してくれるならば、たちまち自由意志は自分自身の自然的な力によつて神と出会うことができ、わずかで弱々しくともなにほどこかのことを行ない、助け、協働し、自らを神の恵みへと適合させ、適応させ、これをとらえ、受けいれ、福音を信じ、またこの行ないの継続と維持にあたつては、聖霊とならんで、自分の力をもつてしても協力することができ」(七九九)とする教えである。すなわち、神人協力説は、人間は原罪によつて靈的には半死の状態であり、それゆえ救いに至るためにはその自由意志はあまりにも弱い、しかし、それでも何らかの力を持ち、救いのために(そして救いに至つた後も)聖霊と協力することができると考えるのである。それに対し、和協信条は、それを完全に否定し、「自己自身を自然的に恵みへと適合させる力は、自分の自然の力に由来するのではなく、聖霊の働きによつてのみ与えられる」(七九九)と断言する。なぜなら、そこには、神の像の理解に対する大きな相違があるからである。すなわち、神人協力説は、神の像は原罪によつて完全には損なわれてはいないと考え、人間の靈的状况は「半死の状態」であると考えるのに対し、和協信条は、「神の像の徹底的な欠乏または『欠

落』を主張し、したがって「原罪によつて人間性は神の前に全く徹底的に毒され、腐敗されている」と考えるからである（七六二）。この点にもう少し注目すれば、このようにも語られている。すなわち、「原罪は、たんにこのような霊的、神的事柄についてのあらゆる善の完全な欠落であるばかりではなく、同時にそれは、人間の中の失われた神の像の代わりに、人間の全体性、全能力、ことに悟性と心情と意志における魂の最高最上の力の、深い、悪い、恐るべき、底なしの、きわめがたい、言いあらわすことのできない腐敗があるということである」（七六三）。このように、和協信条は徹底的な善の欠如と人間性の腐敗を語るのであるが、その主張はそこに留まらない。さらに、こうも主張する。「その結果、墮罪以後人間は『生まれながらの悪い性癖』と心の内的な不純さ、すなわち『悪い欲望と傾向』を受けついでいる」（七六三）⁽²⁵⁾。したがって、霊的事柄においては、人間の自由意志は全く無力であるばかりか、それは神に敵対するるのである。すなわち、「自由意志は自らの、生まれながらの力によつては、自分自身の回心や義や救いに向けてなんらの働きも協働もできず、福音をとおして神の恵みと救いをもたらす聖霊に従ったり、これを信じたり、これに對し『然り』と言つたりすることができないばかりでなく、神の霊によつて照らされ、支配されないかぎり、生まれながらの、悪い、反抗的な性向のゆえに神とそのみこころに敵対的に反抗する」（七八二）のである。

ところで、以上のように、和協信条の見方では、墮罪後を生きる、救いに至る前の自由意志は、完全に無力で悲惨な状況の中に置かれているのであるが、今われわれが問題にしているキングの神人共働論は、救い以後の歩みに関するものである。そのため、この見解を直接それに対応させることはできない。しかし、今から見るように、救い以後の自由意志も、救い以前の悲惨な状況ほどではないとしも、それに近い状況として理解されているのである。すなわち、和協信条は、まず救いとその後の歩みについて、それは全く神の働きとして起こることを主張している。「神が彼ら『人間』の心のうちに真の救いのこの始まりの火を点じてくださり、さらにまだ非常に弱い彼らをつづけて強め、助けて、彼らが終わりに至るまで真の信仰のうちにとどまりつづけるようにしてください」（七八〇）。すなわち、救いを求める思い

を起こさせ、救いに至らせ、さらにその信仰を維持することまで、すべて神の働きであると言っているのである。その結果、人間の自由意志は「よい行い」を行うことができるようになる。なぜなら、「人が信仰によつて神と和解し、聖霊によつて新たにされた」(八二〇)からである。そのことを、和協信条は、さらにこのように語る。「聖霊がみことばと聖礼典とをとおして、われわれのうちに生まれかわりと革新の働きを始めるやいなや、われわれが聖霊の力によつて協力することができし、すべきであるのは、たしかなことである」(七九六)。しかしながら、それはまた限定的なものでもあるのである。というのも、「それは非常に弱いものでしかない」からである。しかも、それは、あくまでも、「聖霊が回心にとまないわれわれのうちに始めた新しい力と賜物による」のであつて、人間に備わつた自然の力というものではないのである。そこで、和協信条は、このことを「二頭の馬が一台の車を引くというような意味で、回心させられた人が聖霊とならんで共に働くのだというように理解されたいというならば、……けつして認めるわけにはいかない」と断言するのである(七九六)。したがつて、人間の自由意志は、あくまでも聖霊の全面的な助けの下でだけ、何らかの力を發揮し、それと協力することができるのであつて、聖霊の助けなくしては、自らには何の力もないのである。また、そればかりか、人間の自由意志は、「再生後にも神の律法に逆らうもの」(七八二)なのである。なぜなら、人間の自由意志は、本質的には変わらないからである。すなわち、それは、「弱く、無能力で無能であり、善に対して死んでゐるばかりでなく、原罪によつてひどくゆがめられ、毒され、墮落してゐて、その性向も本性も全く悪く、神に逆らい、神に敵対しており、また神のみどころにかなわないで、これに逆らうすべてのことに向かつて、あまりにも強力で生き生きと活動的」だからである(七八一―七八二)。したがつて、人間は、救い以後も聖霊の全面的な助けを必要とするのである。そして、和協信条によれば、それを願ひ求めるのが祈りなのである。すなわち、聖霊による救いに与つたのち、「われわれは絶え間なく彼に願つて、神が同じ霊と恵みにより、神のことばを読み、実践する日ごとの訓練をもつて、われわれのうちに信仰と神の天的な賜物を保ち、日ごとに強め、終りまで支えてくださるよう祈るのである」(七八一)。

以上のように、和協信条は、人間の自由意志の無力さを徹底的に主張する。そして、それは救い以前においても救い以後においても、基本的には変わらないのである。したがって、救い以後においても、人間の自由意志の自力による協力ということは全く起こり得ないのである。それはただ、聖霊の全面的な助けの下でだけ可能なのである。したがって、この伝統に立つ限り、キングが語る神人共働論は語り得ないということになる。しかし、キングは、その伝統を批判するのである。それがすでに見た、宗教改革はあまりにも悲観的過ぎるという批判なのである。キングのこの批判は、ボストン大学の人格主義思想の影響から来ている。キングは、ボストン大学で学ぶ中で、宗教改革の伝統に立つ新正統主義者の一人と見なされていたラインホルド・ニーバーの人間観が、人間の罪を指摘するのに熱心で、その結果人間の可能性に対しあまりにも悲観的過ぎるという見解を抱くようになり、その結果、ボストンの人格主義が主張するより肯定的な人間観を継承し、神の像は損なわれてはいるが、完全に消失したのではなく、それは未だ神と共に働くことのできる力を有するとの見解に至ったのである。したがって、ネメシエギの見解を基準とすれば、キングの考えは、神人共働論に限って言えば、カトリックの教えに非常に近く、プロテスタントの伝統から見れば異端的であるとも言える。すなわち、その主張は、先に引用した、和協信条の規定した神人協力説に非常に似ているのである。それは救い以前の論理ではあるが、救い以後の論理として言い直せば、それはそのままキングの主張でもあるのである。そしてそれは、神学史的に遡れば、「半ペラギウス派」の立場に近いとも言える。すなわち、半ペラギウスの立場は、原罪を主張し自由意志を否定するアウグスティヌスの立場と、原罪を否定し自由意志を主張するペラギウス派の中間をいくもので、キングはこの立場に近いと言える。ただし、キングの場合、以下で見るように、その半ペラギウス主義とも大事な点で異なっていると言わなければならない。

ところで、この半ペラギウス主義とキングとの類似性に関して、キング研究者の一人リチャード・ウィルス (Richard Wayne Wills) も同様の指摘をしている。⁽²⁷⁾ すなわち、ウィルスは、四世紀から五世紀に活躍した半ペラギウス主義を代

表する一人ヨアネネス・カッシアヌスとの比較をとおしてそのことを論じ、以下のように結論づけている。「彼ら「カッシアヌスとキング」にとつて、ペラギウスもアウグスティヌスも、宗教改革者たちの神の像もルネッサンスの思想家たちの神の像も、彼らの中に、また彼らにとつて、満足ゆく枠組みをもたらさなかった。解決は、二つのものを総合することによつてのみ与えられた。このことは、ペラギウスの語る善に対する人間の自己決定の教えを加える一方で、アウグスティヌスが語る「神の」助力する恩寵の教えを肯定する立場へと調停した。カッシアヌスの「主張するのと同様の」神の像論の解釈を維持しながら、キングは、『協力の恩寵』(cooperative grace) という理念を完成させる見解を保持した。カッシアヌスの場合と同じように、彼は人間の自由意志を強調し、したがってまた自発的に神と神の意志として個人と社会の秩序に与えられている善とを熱望し選択する人間の力を強調する神学的人間学を採用した。善を実現する神の助け及び力と一つとなつて選択する能力は、神の恩寵の反映であつた。この意味で、人間は、神の創造への意志と共働する能力を持つたのである。……両者の神秘的な混交において、人間は人間を神の像に創造した神と共働することを選擇できたのである」⁽²⁸⁾。このように、ウィルスは、キングの考えが半ペラギウス主義を代表するカッシアヌスと基本的に同じであると理解する。ただし、そこには救い以前と以後の区別はなく、あくまでも神と人間との共働に関する点に絞られている。しかし、それは、人間は神の助けと力を受けて自発的に善を求めて神と共働することができるとするもので、ここには直接出てこないが、人間の自由意志を、全面的にはないが、認めるものである。そして、その点において、半ペラギウス主義者のカッシアヌスとキングは同じであると見ている。

ただし、その場合、あくまでも重要なのは神の「助けと力」としての恩寵である。ウィルスは、それを「共働の恩寵」と表現したが、それは射た表現であらう。しかし、このウィルスの議論には一つ欠けている点があると言わなければならない。それは、キングは、神の恩寵を語るのには確かであるが、その内容である。それは、キングにとつては、自由意志を助け励ます力であると同時に、それは「半死の状態」にある自由意志を癒す力でもあるからである。す

なわち、キングは、ニーバーを批判する中で、次のように語っている。「人間の性質に関するニーバーの悲観主義は、神の性質に関する楽観主義と調和していなかった。彼は、人間の罪という病気を診断することにも急であつて、神の恩寵の治癒力を見おとしめたのだ」⁽²⁹⁾。すなわち、キングは「神の恩寵の治癒力」について語るのである。これは、重要な主張であると言える。というのも、キングにおいては、「半死の状態」にあつた自由意志は、神の「助けと力」という「共働の恩寵」を受けるとのみならず、それ自体癒されて神との共働に叶う働きができると考えるからである。すなわち、それは、自由意志が癒されることによつて、それが持つ自然の力が回復され、力を増し、二頭立ての馬車とまではいかないとしても、それに近い働きができること意味している。確かに、その治癒自体がどの程度のものであるかは触れられていない。完全に癒されているのか、ある程度なのか、それは不明である。しかし、それは、初めからある程度自由意志の自然力を認めている半ペラギウス主義よりも、もっと大胆に人間の可能性を語るものであると言えよう。そして、この点において、キングの神人共働論は、半ペラギウス主義に近いとは言え、それと区別されると言わなければならない。

6. 評価——日本の現状も含めて

以上のように、キングの神人共働論は、宗教改革の伝統よりは、カトリック教会に見られる神人協力説や半ペラギウス主義に近いものである。それは、アウグスティヌスに見られる神の絶対的恩寵を退け、人間の自由意志にある程度の位置を与えるものである。その限り、プロテスタント教会の語る「信仰のみ」、「恩寵のみ」の原理は損なわれているとも言える。ただ、問題は、その恩寵をどう理解するかで、その是非の判断は分かれるとも言える。キングも恩寵を語

るのである。そして、その恩寵の一つの大きな働きは治癒にある。それは、信仰義認論で言えば、義と認められるという法廷的義ではなく、義となるという実質的義である。「半死の状態」にあった自由意志が「治癒された」自由意志となるのである。それは、自由意志に自然の力を回復させることである。そして、その回復した自然の力を持つて、人間は神と共働することができるとし、またしなければならぬのである。そこに、「神の子」となるという新しい倫理が生まれてくる。また、それに加え、このキングの主張にはもう一つ「自由」の問題があると言える。キングは、神の像を何よりも自由として理解するが、それは選択し、決断する自由でもある。そして、その結果、それは責任を伴うのである。そうした自由というのは、一方的な神の恩寵の主張においては、位置を持ちづらいと言える。キングは、先に見たように、神を「父」として理解する。それは、放蕩息子の子の父親のように、一方では息子の放蕩に心を痛めつつも、息子が立ち返ることを願い、待ち望む父である。そして、立ち返った暁には、両手を広げて迎え入れるのである。その父は、言わば、愛においては無限であるが、行動においては有限なのである。決して、一方的にことを図る存在ではないのである。そういう意味でも、キングが語る人格神は、「無限的・有限的神」なのである。そして、それは何よりも、人間に神の像としての自由を認めるからで、その自由には人間の自由意志が深く関わっているのである。加えて、この考えには、キングの樂觀論が見て取れる。それは、神の恩寵に支えられた人間性への信頼である。その信頼こそ、キングの樂觀主義を生み出した背景であると言えるが、この確信と樂觀論は、キングの非暴力直接大衆運動を顧みたとき、その運動を推進する力となったことは明らかである。歴史を変えるのが神の一方的な働きにあるとすれば、あのような闘いは起こり得なかったであろう。歴史における神の働きへの信頼と共に、神の恩寵の下で歴史を変える力と責任が人間にもあり、またその力もあるとの人間への信頼が、キングをしてあの運動へと駆り立てたのである。そのことを思うとき、キングの恩寵理解は、確かにプロテスタントの伝統的な理解からは外れるとしても、充分意味と価値のある理解であると言わなければならないように思う。

また、このことは、特に日本の教会の現状に目を向けたとき、一層意味があるように思われる。たとえば、古屋英雄は、日本の教会の教勢の不振と教会学校の生徒の減少といった実状を顧みる中で、神人協力説の再考の必要性を指摘している。というのも、古屋は、日本の教会の伝道の不振の原因にカール・バルトの影響を見ているが、特にバルチアンの一人であった桑田秀延が一九三五年に行つたいわゆる「日光講演」を問題視しているからである。この講演の題は「福音主義より見たる宗教教育——キリスト教的宗教教育の原理を求めて」というものであったが、古屋によれば、桑田はニーグレンの『アガペーとエロース』を引き合いに出して、現代の宗教教育、具体的には日曜学校は、神人協力主義であつて、それはエロース的な神学であると決めつけ、それに対し、福音主義的宗教教育はアガペー的な神学であると主張したと言う。そして、その結果、「キリスト教界でも神人協力主義が異端であると指弾されることを恐れて、キリスト教主義教育やキリスト教社会事業などの分野に力を注ぐことから撤退した」と診断する。また、これは戦前の話であるが、古屋は、「(日曜学校の生徒の)減少傾向は戦後の『キリスト教ブーム』の時期以外は続いたままである」とし、近年一層顕著になっている減少傾向も、この戦前の影響の延長線上にあると見ている。そして、結論としてこう語っている。「問題は弁証法神学が、我が国の教会学校のみならず、キリスト教主義学校、あるいはキリスト教社会福祉事業に及ぼした影響である。人間がやることを神人協力主義の一言のもとに、やる気をなくさせる、あるいは届ませるネガティブな働きをしたのではないか、と思わされるのである」。こうした判断の下、古屋は神人協力説の再考の必要性を主張するのである。⁽³⁰⁾

さらに古屋は、再考の必要性を説くだけではなく、その試みもしている。それは、基本的には、「原義の再発見」の必要性ということで論じられている。すなわち、古屋によれば、原義 (*justitia originalis*) とは、「原罪の前に与えられた義の状態」を指すが、宗教改革期、特にカルヴァン派はドルト会議で全的墮落を認めたため、原義が墮罪後に完全に失われたと考えた。しかし、古屋は、一九九五年の阪神・淡路大震災時のボランティア活動や二〇一一年の東日本大震

災時のボランティア活動を念頭に置きながら、この考えは現実にはすぐわかないのではないかと反問する。そして、ライオンホール・ニーバーが原義を取り上げ、「罪ある人間が失ったと仮定される原義は、人間の自由の究極の欲求として、実際に彼と共にある」と主張している点に触れながら、改めて人間には原義があると主張するのである。そして、それは同時に、神の像が失われていないことを主張するものでもあり、また神人協力説の有効性を語ることもある⁽³¹⁾。そして、改めて、こう主張するのである。「神人協力説を否定する考え方は、人間の努力を否定しかねない。バルト神学の検証が必要なのは、この点であろう。人間側の努力における神の恵みを忘れるかのように説くからである。『神の恵みか、人の努力か』のあれかこれかではない。神の恵みと人の努力の両方が、救いのために必要なのである」⁽³²⁾。

このように古屋は、日本の教会やキリスト教界の諸事情を顧みながら、神人協力説の必要性を主張するのであるが、その主張は、キングの神人共働論に大いに共鳴すると言える。また、古屋も触れている、ボンヘッファーが語った「安価な恵み」の問題は、こうした問題が日本だけの問題ではなく世界の問題でもあることを如実に語っていると言えるが、そうした現状を鑑みることにしても、あの厳しい公民権運動の闘いの中でキングを支えた精神的（霊的）力としての神人共働論は、キリスト教世界に新たな勇氣と希望を与えようと言える。

注

(1) 詳細については、以下の拙論を参照。「M・L・キングの神観念と人格主義思想——博士論文を中心として」（『聖学院大学総合研究所紀要』第四六号、二〇〇九年）。特に、三二八—三三〇頁。なお、この論文においては、「co-operation」を「協働」

と訳したが、本論では「共働」と訳す。

- (2) Rufus Burrow, Jr., *God and Human Dignity: The Personalism, Theology, and Ethics of Martin Luther King, Jr.*, 2006, p. 92

- (3) M・L・キング著、雪山慶正訳『自由への大いなる歩み』（岩波書店、一九五九年）、一一九頁。なお雪山訳では「協働者」と訳されているが、本論では「共働者」という訳語を用いる。これは、どちらの訳でも可能であるが、全般を見渡して「共働」という訳語の方がより柔軟性があると思われるからである。また、伝統的に用いられてきた「神人協力説」との混同を避ける意味でも「共働」という言葉にした。

- (4) この「神人共働論」は、伝統的に用いられてきた「神人協力説」とは異なる。神人協力説は、基本的には人間が信仰に至る過程において両者の協力の必要性を説くものであるが、神人共働論は、信仰を得ている者が、信仰の歩みにおいて与えられている恵みとして、神の共働を説くものである。

- (5) これは、キングの説教集『汝の敵を愛せよ』（運見博昭訳、新教出版社、一九六五年）に収められている。本文に記されている数字は、本書からの引用頁数である。

- (6) この宗教改革に対する批判は、アメリカで新正統主義と呼ばれるグループの一人と見なされているラインホルド・ニーバーの罪の理解に対しても向けられている。この点については、以下でまた論じたいと思う。

- (7) マーチン・ルーサー・キング著、猿谷要訳『黒人の進む道——世界は一つの屋根のもとに』（明石書店、一九九九年）、一三七頁。

- (8) マーチン・ルーサー・キング著、中島和子・古川博巳訳『黒人はなぜ待てないか』（みすず書房、一九六六年）、九七頁。

- (9) 同、九八頁。

- (10) 同上、一〇五—一〇六頁。

- (11) この点について、キングは、ラインホルド・ニーバーが著した『道徳的人間と非道徳的社会』に深く共感し、このように語っている。「個々人は道徳の燭光に目ざめ、自己の不正な態度をみずから放棄するようなことがあるかも知れませんが、ラインホルド・ニーバーが語っているように、集団というものは、何人よりも不道徳なものです。」（同上、九七頁）。

- (12) 同上、九六頁参照。

- (13) 拙論「M・L・キングと非暴力——歴史における救済の原理をめぐる」（東京神学大学神学会『神学』七四号、教文館、

二〇一二)。

(14) 前掲『黒人の進む道』、一三八頁。

(15) 同上。なお、ここで語られている「よりいつそう高度の統合体」というのは、具体的には以下のように語られている。「実に、話し合いこそが直接行動の目的とするところなのです。非暴力直接行動のねらいは、話し合いを絶えず拒んできた地域社会に、どうしても争点と対決せざるをえないような危機感と緊張をつくりだそうとするものです。それは、もはや無視できないように、争点を劇的に盛りあげようというものです。(中略)ひとびとが偏見と人種差別の暗いどん底から、理解と同胞愛の荘厳な高嶺へ達するのに役立つような緊張を社会に生み出すために、非暴力によるうるさがたが必要であるということを理解しなければならないのです。」(前掲『黒人はなぜ待てないか』、九六頁)。

(16) 同上。

(17) 猿谷要もこの表現を使っている。猿谷要『キング牧師とその時代』(日本放送出版会、一九九四年)、一〇三頁。

(18) 前掲『自由への大いなる歩み』。本書からの引用頁数は、引用文の後に随時記す。

(19) Lewis V. Baldwin, *Never to Leave Us Alone*, 2010, p. 101 またボールドウィンは、キングの祈りを集めた以下の書物を出しているが、これもキングにおいて祈りがいかに大きい位置を持っていたかを示している。『*Thou, Dear God: Prayers that Open Hearts and Spirits*, 2012.

(20) 前掲『自由への大いなる歩み』、一六七―一六八頁。

(21) M・L・キング述、クレイボーン・カーソン、クリス・シェバード編、梶原寿監訳『私には夢がある――M・L・キング説教・講演集』(新教出版社、二〇〇三年)、二四五頁。ただし、訳を一部変更した。

(22) この点について、拙論「マーティン・ルーサー・キングの愛の概念をめぐる――パウル・ティリッヒに触れつつ」(聖学院大学キリスト教センター発行『キリスト教と諸学』一七巻、二〇〇一年)参照。

(23) 新カトリック大事典編纂委員会編『新カトリック大事典IV』(研究社、二〇〇九年)、四一五頁。以下の議論も、この項目による。

(24) 信条集専門委員会訳『一致信条書』(聖文舎、一九八二年)、七七六頁。以下、本書からの引用頁数は、随時引用文の後に記す。

- (25) 引用文中の引用文は、一五三〇年に出された『アウグスブルク信仰告白』を弁証するために翌年の一五三一年に出版された『弁証』からの引用である。
- (26) この点に関して、キングは次のように語っている。「ぼくが、ニーバーが人間の性質の腐敗していることを強調しすぎていることをみとめるようになったのは、ボストン大学においてであった。人間の性質に関するニーバーの悲観主義は、神の性質に関する楽観主義と調和していなかった。彼は、人間の罪という病気を診断することにあまりにも急であって、神の恩寵の治癒力を見おとしてしまったのだ。」(前掲『自由への大いなる歩み』、一一九頁)。
- (27) Richard Wayne Wills Sr., *Martin Luther King, Jr. and the Image of God*, 2009.
- (28) *Ibid.*, p. 95.
- (29) 前掲『自由への大いなる歩み』、一一九頁。
- (30) 古屋安雄『キリスト教新時代へのきざし』(オリエンス宗教研究所、二〇一三年)、六八―七〇頁。
- (31) この点の議論は、先のキングのニーバー批判と矛盾する形になるが、ここではその点については論じない。
- (32) 古屋前掲書、一六四―一六五頁。